Japan Hang & Paragliding Federation ● https://jhf.hangpara.or.jp
JHFレポート255号
2026年10月30日発行

JHFREPORT



「2026パラグライディング日本選手権 in ニセコ」より。撮影：中村浩希選手（12-13ページに報告を掲載）

「空の日」日本航空協会表彰・国際航空連盟賞伝達

9月20日の「空の日」に合わせ日本航空協会表彰が行われ「航空宇宙に関する文化・科学技術・事業ならびにスポーツなどの発展に著しく寄与した方、またはグループ」に航空亀齢賞、航空功績賞、航空特別賞、空の夢賞が授与され、国際航空連盟（FAI）の三つの賞の授与が伝達されました。受賞された皆さま、おめでとうございます。

ポールティサンディエディプロマ

航空一般、特に航空スポーツ発展のために献身的努力を傾注し、団体組織等で指導的役割を果たし、その業績が顕著である個人に授与される。日本女性航空協会理事長として活躍されてきた鐘尾みや子さんと、NPO法人日本マイクロライト航空連盟理事長等の要職を務められた相馬元実さんが受賞。

アルフォンス・ペノー・エアロモデリング・ディプロマ

模型航空機に関連して素晴らしい業績を収めたFAI会員国の模型航空家に授与される。橋本勇希さんが受賞。

FAIエアスポーツメダル

熱気球の環境作り、競技会運営や若年層の教育訓練等に顕著な功績や貢献があったとして、髙島工さんが受賞。

スポーツくじ
BIG toto WINNER DUNK
JHFレポートはスポーツ振興くじ助成金を受けて発行しています

JHFフライヤー宣言

1. 自分の意志と責任でフライトします。
2. 自己の健康管理を行い、健全なフライトをします。
3. 社会のルールを守り、第三者に迷惑をかけません。
4. 自然を大切にします。

安全に楽しく

事故に学ぶ：同様の事故を繰り返さないために

JHF安全性委員会　委員長　伊尾木 浩二

これまで、様々な事故の情報に接してきました。その多くが、以前に起きた事故の繰り返しだと言えます。事故情報に対しては誰もが敏感でしょう。各人が事故者の置かれた状況を想像し、そこに至るまでに何が足りなかったのか、何をすべきだったのか、いろいろ考えると思います。

しかし、それでも同様の事故が起きてしまう……。

繰り返しの事故を防ぐには、これまで以上に「過去の事故に学ぶ」という意識を強く持つことが必要ではないでしょうか。

今号では、事故報告（下表）をもとに、同じような状況に陥らないための対策を考えました（報告された事故時の状況とは多少異なることもあります）。他ならぬ自分自身のこととして、安全なフライトの参考にしていただければと思います。

河川上空での高度処理

河川の上空での高度処理では、冷たい川の流れと日照で温められた石、地面などの影響で、局地的に空気が強く対流しやすくなる可能性があります。今回の事故は「突風」により流されたことから起きていますが、穏やかなコンディションのときでも、河川上空の通過と高度処理では、より注意することが望ましいです。

また河川の上空で潰されると想定以上に高度ロスし、川の中に不時着した場合、流されて溺死するリスクにも繋がります。ギリギリで岸に着陸したものの機体が着水し、パイロットが引きずられて流された事故も過去に発生しています。

高度処理は極力、河川の上空を避けること。

万が一、川に着水した場合（キャノピーだけ着水した場合も含む）、ラインカッターを準備しておき咄嗟の時にはカットするなどの対処が必要です。

これらを日頃から考慮しておくとリスク減に繋がります。特に河川、湖、海岸近くでフライトされる方はご注意ください。

目線

障害物にぶつからないためには、離陸から着陸までの「目線」についても注意が必要です。今回の事故は講習中に起きていますが、飛び慣れていない講習生は特に、目線による危険性が多くあることを覚えておきましょう。

目線は進行方向を生み出すような力があり、目線の先に障害物があればそこに向かう可能性が高いと言われます。離陸から着陸まで、自分が目標とする進行方向を見ることは重要であり、障害物への衝突を防止するために最も大切なことです。もちろん障害物を認識する上で「見る」ことは必須ですが、「見続ける」ことは事故に繋がるおそれがあります。

また、多くの経験を持つベテランパイロットでも、年齢による影響に注意する必要があります。周囲を確認するときは、必ず頭部をしっかりと動かし旋回方向を確認しましょう。これは、衝突を防止するために重要です。

日頃から目線を意識してフライトを行ってみましょう。

高度処理はシンプルに

高度処理から着陸においてのリスクを減らすためには、高度処理をシンプルに済ませることが重要なポイントです。普段から旋回が多い高度処理、また高い高度での進入をされている方は、高度処理方法の見直しが必要です。

高度処理の旋回回数を減らす、そしてファイナルアプローチまでに適切な高度に合わせるには、滑空比調整の技術を習得することが必須です。なんとなく高度を合わせるのではなく「調整する」ことをしっかり頭に置いて練習しましょう。

また着陸に自信のない方は、着地前にやや速度をつけてフレアをかけることを意識してみてください。着陸への不安やアプローチミスをしたときの焦りなどから早すぎるタイミングで減速すると、失速するおそれがあり、要注意です。

機体の性能はさまざまであり、特にアスペクト比による特性、ラインバランスや翼面荷重の影響で着陸進入速度も変化します。また失速特性も変わります。

高度処理、着陸に少しでも不安を持つ方は、教員に相談して改善する気持ちが重要です。

2026年の事故報告　5月13日～8月23日（報告順）

	事故日	機種	天気	内容	EN	年齢	経験年	性別	技能証	状況
28	2026/6/7	PG	晴れ	競技中、LDアプローチ時に川の上空10mで突風が吹き、流されてコンクリートブロックの隙間に着陸。その時に頭部をブロックに強打。	D	70	38	男	XC	頸椎骨折
29	2026/6/27	PG	晴れ	スクール受講中、離陸し右に舵を切った際、そのまま車がある方向に向かってしまい、６台駐車していた真ん中の車にぶつかってしまった。	A	53	3	男	B	足擦り傷
30	2026/6/29	PG	曇り	対地高度が低い状況で旋回を試みたが、躊躇したところ木を避けられず衝突した。	B	57	8	女	XC	脚打撲
31	2026/5/13	PG	曇り	高度処理、林と林の間を飛行中に、右翼が木に接触し、右側に傾き２～３mの高さより落下する。	A	70	11	男	B	腰椎骨折
32	2026/7/25	PG	晴れ	高度処理でローリングを行い、操縦ミスにより片翼が潰れ、急旋回に入り電線に引っ掛かる。	B	60	7	男	P	脚打撲
33	2026/8/23	PG	曇り	着陸進入時、ターゲットを越えたため、無理に引き過ぎ、２～３mから失速。腰から落下したが手も接触し骨折（ヒビ）。	A	65	31	男	P	手首骨折

●事故やインシデントの情報収集にご協力ください●

もし、事故を起こしてしまったら、あやうく事故になるようなミスをしてしまったら、あなたはどうしますか？

自分の失敗を人に伝えるのは、嬉しいことではないでしょう。ベテランパイロットであれば尚更、気が進まないことではありませんか。できれば黙して語らず……しかし、あなたの経験が空の仲間の安全につながるとしたら、どうですか？

JHF安全性委員会では、事故再発防止のために、事故やインシデントの情報を収集しています。JHFウェブサイト＞会員ページ＞JHF安全情報収集ページ（会員ページトップの画面左上に赤枠の入り口）または右下のQRコードから情報をお寄せください。

誰かが同様の事故を繰り返す前に防止できるよう、ご協力をお願いします。

■あなたが事故当事者、エリア管理者、教員などスクール関係者の場合

1．アクシデント（本人が怪我をした／第三者に損害を与えた等）→**事故報告**

2．インシデント（アクシデントには至らなかったが、ヒヤリとした／ハッとした）→**インシデントレポート**

■あなたが事故当事者やエリア管理者／スクール関係者ではなく、事故やインシデントの目撃者の場合→**事故等目撃レポート**

【安全情報収集ページ】
https://sites.google.com/view/jhf-safetyr/

●セーフティノーツ（機材に関する安全情報）：必ずご確認を●

JHFウェブサイト、安全性委員会のページにDHV（ドイツのハンググライディング・パラグライディングを統括する連盟）やメーカー等が発表する、ハンググライダー、パラグライダー、それらの装備品についての安全情報「セーフティノーツ」があります。

あなたの大切な機材に関する情報があるかもしれません。安全にフライトを楽しむために、セーフティノーツの確認を習慣にしましょう。詳しくはJHFウェブサイト＞会員ページ＞安全性委員会のページをご覧ください。

【セーフティノーツ】
https://jhf.hangpara.or.jp/jhsc/safetynote/note001.html

●訂正

前号３ページ「セーフティノーツ：必ずご確認を！」に誤記がありました。訂正してお詫びします。

［誤］■Pro Design 社 ALFAcross*80/*100/*115/*120/*140/*220

［正］■ALFAcross*80/*100/*115/*120/*140/*220

●タンデムパイロットの皆様にご注意●

タンデムフライトにおいて、一般の方（家族以外の方）を同乗される場合には『JHF上級タンデム技能証』が必須です。

まず検定を受けて、上級タンデム技能証を取得してください。検定会の予定はJHFウェブサイトなどでご案内しています。

もし、上級タンデム技能証を保有していないパイロットが一般の方とタンデムフライトをしているのを見かけたら、お手数ですがJHF事務局までお知らせください。

上級タンデム技能証保有者リストは下のQRコードから確認できます。

【JHFウェブサイト】
https://jhf.hangpara.or.jp
JHFのご案内

自由な空を、一人ひとりの責任で守る

公益社団法人日本ハング・パラグライディング連盟　会長　竹村 治雄

風を読み、自分の判断で空を飛ぶ。その自由は、ハンググライディングやパラグライディングの大きな魅力です。しかし、飛行を支える制度は、国によって異なります。

例えばドイツでは、法制度に基づく操縦資格と賠償責任保険が必要で、外国から訪れるフライヤーにも資格の確認などが求められます。一方、英国では、ハンググライダーやパラグライダーの操縦に国の免許は必要なく、競技団体が教育や技能認定を担っています。国によって、公的な規制と自主的な管理の組み合わせが違うのです。

日本では、国が定める操縦免許によらず、統括団体による自主規制・自主管理を基本として、このスポーツが発展してきました。先人たちが関係機関と協議を重ね、会員登録や技能認定、安全教育などを通じて築いてきた仕組みです。私たちが今日、自由度の高いフライトを楽しめる背景には、こうした努力と社会からの信頼があります。

もちろん、自主管理の下でも、関係法令や空域の制限を守ることは、大前提です。土地所有者の了解やエリアのルールを尊重し、地域の暮らしや自然にも配慮しなければなりません。自由なフライトを支える責任は、連盟やエリア管理者だけでなく、一人ひとりのフライヤーが担っています。

天候と自分の技量を冷静に見極め、機材を点検し、必要な知識を学び続ける。条件が合わなければ、飛ばない判断をする。事故や危険な経験を共有し、仲間の安全にも心を配る。こうした日々の行動が、自主管理を実効性のあるものにします。

一人の無責任な行動が、地域との信頼関係を損ない、その地域のフライトエリアにも影響することがあります。

自分のフライトに責任を持つことは、皆の空を守ることです。この自由を次の世代へ引き継ぐために、私たち自身の行動で、安全と信頼を積み重ねていきましょう。

JHFの動き

JHF技能証規程の一部を改定しました

8月28日のJHF理事会において、技能証規程を一部改正しました。

大きな変更点は下記のとおりです。

□教員・助教員技能証実技検定試験科目を変更しました。

□教員の教習実技を、学科教習実技と誘導教習実技に分けました。

教員・助教員技能証検定を受検される方は、事前にJHFウェブサイトの技能証規程をご確認ください。

教員・助教員更新講習会を各地で開催します

2027年3月末で技能証の有効期限を迎える教員・助教員の方を対象に、教員・助教員更新講習会を各地で開催します。

JHFウェブサイトまたは下のQRコードから「教員・助教員更新講習会細則」をご確認の上、受講をお願いします。

【JHFウェブサイト】
https://jhf.hangpara.or.jp/office/koshinkoshukai_2026.html

上級タンデム技能証検定会 紀の川／朝霧で開催

一般の方を同乗者としてタンデムフライトを行うには、JHF上級タンデム技能証が必須です。

JHFでは各地で上級タンデム技能証検定会を開いています。今後の2026年度検定会は、12月に和歌山県紀の川、来年2月に静岡県朝霧での開催を予定しています。日程を確定しましたらJHFウェブサイトでご案内しますので、受検をご希望の方はご確認ください。

改正小型無人機等飛行禁止法の施行とクロスカントリー飛行時の手続徹底について

公益社団法人日本ハング・パラグライディング連盟　会長　竹村 治雄

2026年6月17日に第221回国会で『改正小型無人機等飛行禁止法』が成立し、6月24日に公布、7月14日に施行されました。

今回の改正により、重要施設の周辺に設定される飛行禁止区域、いわゆる「イエローゾーン」が従来の概ね300mから、概ね1,000mに拡大されています。ハンググライダー／パラグライダーは、同法上の「特定航空用機器」として、引き続き規制の対象となりますので、ご注意ください。

●法律の基本的な考え方

小型無人機等飛行禁止法は、重要施設とその周辺地域の上空における飛行を原則として禁止するものです。一方、対象施設の管理者等から必要な同意を得たうえで都道府県公安委員会等へ通報するなど、法令に定められた手続きを適切に行った場合は、一定条件のもとで飛行することができ、ハンググライダーやパラグライダーの飛行を全国一律に禁止するものではありません。対象施設周辺を飛行する場合は、飛行者自身が事前に規制区域を確認し、必要な同意取得と通報を確実に行うことが求められます。

●XC飛行を行う場合

クロスカントリー（XC）飛行では、気象条件や上昇気流の状況によって飛行経路が変化するため、意図せずイエローゾーンに接近または進入する可能性があります。XC飛行を計画する際は、次の事項を必ず遵守してください。

1）スタート地点のエリア管理者への事前連絡

XC飛行を計画していること、予定している飛行方向および飛行経路を、予めスタート地点のエリア管理者に連絡してください。エリア管理者が定めるローカルルールや飛行条件にも必ず従ってください。

2）規制区域の事前確認

まず警察庁および国土地理院の地図等により、予定経路とその周辺にレッドゾーンまたはイエローゾーンが存在しないかを確認してください。一時的に指定される対象施設についても、必ず最新情報を確認してください。

3）イエローゾーンを飛行する可能性がある場合の手続

計画した経路や予想される飛行範囲がイエローゾーンに含まれる可能性がある場合は、飛行前に対象施設の管理者に連絡し、飛行についての同意を得てください。そのうえで、原則として飛行開始48時間前までに、当該区域の管轄警察署を経由して都道府県公安委員会に所定の通報を行ってください。

通報書には、飛行区域を示す地図、同意を証明する書面の写し、機器の写真などの添付が必要です。なお、警察署の窓口に加え、e-Gov電子申請サービスを利用して通報することもできます。

4）手続が完了していない場合は飛行しないこと

対象施設管理者の同意取得および公安委員会への事前通報が完了していない場合は、イエローゾーンに進入してはなりません。

XC飛行では気象条件によって経路が変わる可能性があります。イエローゾーンへの進入を確実に回避できないと判断される場合は、飛行計画を変更するか、XC飛行を中止してください。

5）対象防衛関係施設・対象空港等に関する追加手続

対象防衛関係施設または対象空港の周辺を飛行する場合は、公安委員会への通報に加えて、施設管理者への通報等が必要となる場合があります。また、海域を含む場合には、管区海上保安本部長への通報も必要です。十分な期間を確保し、関係機関に事前に確認してください。

●法令遵守の徹底について

改正法では、イエローゾーンにおける違反飛行について、警察官の命令を経ることなく罰則が適用される規定が設けられました。違反した場合は、6月以下の拘禁刑または50万円以下の罰金に処せられる可能性があります。

自由な飛行環境を将来にわたって維持するためには、私たち一人ひとりが法令と地域のルールを正しく理解し、関係機関や地域社会との信頼関係を築くことが不可欠です。会員の皆様におかれましては、XC飛行における事前確認、同意取得および通報手続を徹底されますよう、お願いいたします。

＊本文は一部要約しています。全文はJHFウェブサイトでご覧ください。

【JHFウェブサイト】
https://jhf.hangpara.or.jp
JHFのご案内

県連だより

■飛行自粛のお願い
大阪府フライヤー連盟

11月14日（土）・15日（日）に、大阪府で『全国豊かな海づくり大会～魚庭（なにわ）の海おおさか大会～』が開催されます。大阪府警察から当連盟に「安全管理のために、会期中に府内で飛ばれる方、イベントを予定されている方は、事前に報告いただきたい」と要望がありました。

当連盟としては、原則として会期中は、舞洲でのトーイングでのフライトならびに葛城エリアの西テイクオフからの離陸（＊）以外、大阪府内は飛行自粛とします。

具体的には「大阪府内にクロカンで飛んで来ない」「モーター使用で大阪府内での離着陸をしない」ということです。皆様のご理解・ご協力をお願いします。

＊葛城エリア西テイクオフから離陸後の大阪府側フライトも極力自粛。

大阪府連盟　理事長　片岡義夫

■「空を見上げてIN東京」でVR体験
東京都ハング・パラグライディング連盟

８月１日と２日の２日間「空を見上げてIN東京」が開催され、東京都ハング・パラグライディング連盟はハンググライダー（HG）およびパラグライダー（PG）のVR（仮想現実）体験会を実施した。

これは、2013年より開催の東日本大震災復興支援の気球イベント「空を見上げて」へ日本航空協会（JAA）が共催、航空スポーツ団体が協力して、東京有明の広域防災公園で毎夏開催されている恒例行事だ。

当日は多くの小・中学生がブースに足を運び、２日間の体験者数はHG・PG合わせて延べ50名。強い日差しと暑さのなかだったが、ヘッドマウントディスプレイを装着した子供たちからは、目の前に広がる鮮明な映像と独特の浮遊感に驚きや歓声が上がった。シミュレーターのHGベースバーやPGライザーに実際に触れ、映像の動きと連動した本格的な操縦体験に夢中になる子供たちの姿が非常に印象的であった。

また、モニターには体験者と同じ視点の映像がリアルタイムで映し出され、順番を待つ家族や観客も「本当に飛んでいるみたい」と画面を見つめ、ブースは終始賑やかな応援と笑顔に溢れていた。

本イベントは、多くの子供たちへスカイスポーツの爽快感や魅力を伝える良い機会となった。JAAの関係各位、ならびに厳しい暑さのなかで設営・運営を支えてくれた会員の皆様に心より感謝したい。今後もこうした活動を通じ、スカイスポーツのさらなる普及と発展に努めていく所存だ。



VR体験に夢中。写真提供：日本航空協会

学連ニュース

８月から９月の夏休み期間に、ハングでは足尾で学生大会が、パラでは今年からの試みとして朝霧高原にて練習合宿が開催されました。今回は、それぞれに参加した学連副理事長の２名よりイベントの様子をお伝えします。

■ハング学生大会

まずはnasa STUDENT CUP2026から。nasaS2026は９月１日から４日（初日は公式練習日）に足尾で開催されました。気象条件が悪くエキスパートクラスは競技不成立、1st、2ndクラスは３日中２日間で競技が成立しました。

競技以外にも年に数回しかない遠方の学生フライヤーと顔を合わせられるこの機会に、選手同士はもちろんスタッフとして参加していたパラの学生や新入生も選手と親睦を深めている場面が見られました。


nasaS2026ではエリアを跨いだ多くの交流が見られた。

天候に恵まれないながらできるだけのフライトができたこと、昨年度までのパラ・ハング合同の砂丘合宿が開催されない中でもエリアやグライダーを跨いだ交流が見られたこと、良い大会となったのではないでしょうか。（平澤）

■パラ練習合宿

９月７日、８日に朝霧高原で合宿を行いました。当初はフライトを楽しみながら、参加者同士の交流を深める予定でしたが、天候に恵まれず、屋内講習やレクリエーション、食事会を中心に親睦を深めました。

講習では、まず「パラグライダーが上手い」とはどういうことか、安全なフライトとは何なのかについて考えました。特に、安全な場所を探すだけでなく、危険な場所を避けることが重要だという考え方が印象に残りました。また、テイクオフが苦手ということでは、苦手な部分を感覚だけで終わらせず、具体的な要素に分けて考えることの大切さを実感しました。その後は、ソアリングについてのグループで意見交換を行いました。


朝霧合宿でのソアリング講習。いろいろな学びがあった。

今回の合宿で得た知識をそれぞれのエリアで実践し、次に朝霧高原を訪れた際には、フライトを思い切り楽しみたいと思います。（高木）

最後に、ハング学生大会とパラ練習合宿でお世話になったエリア・スクール関係者の皆様、協賛いただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。学連は全国の学生フライヤーが活躍できるよう活動してまいりますので、ご理解ご協力いただけますよう今後ともよろしくお願いします。

学連副理事長　平澤 巽／高木 陸大

Flyer's Voice
Aoi OTA

太田　葵　会社員

“本当に自分は空を飛んでいるんだ”と実感できる


ホームエリア・スクール：板敷山・ハンググライダースクール晴飛

■ハンググライダーを始めたきっかけは？

YouTubeのおすすめにハンググライダーで飛ぶ人の映像が流れてきたことがきっかけです。動力を使わずに空へ飛び立ち、風を利用して自由に飛び回る姿を見たときは、本当に衝撃を受けました。

小さい頃はドラえもんを見ながら、「自分も空を自由に飛べたらいいな」と夢見ていました。でも、それは子どもの頃だけの夢だと思っていたので、「本当に人が飛べるスポーツがあるんだ」と知ったときは驚きと感動でいっぱいでした。

「これは一度体験してみたい！」と思い、持ち前の行動力でその日のうちに体験入校を申し込みました。フライトを見学すると、想像以上に美しく、空を飛ぶ先輩方がとてもかっこよく見えて、その場で入校を決意しました。

ところが、始めてみると現実は想像以上に大変でした。機体は重いし、グラハンは思うようにできないし、転んで泥だらけになることもしょっちゅう。優雅に空を飛ぶ先輩方と、地面で必死にもがく自分とのギャップに、「本当に飛べるようになるのかな」と不安になって、少し泣いてしまった夜もありました。


空を飛ぶ時間は、日常から解放される特別な時間。

それでも、インストラクターや先輩方の根気強い教えや励ましのおかげで初飛びの日を迎えることができました。初めて自分の力で空へ飛び立った瞬間の感動は今でも忘れられません。「諦めずに続けて本当によかった」と心から思えた瞬間でした。

■ハンググライダーをやって良かったことってありますか？

一番よかったことは、自分の世界が大きく広がったことです。

ハンググライダーを始めなければ出会えなかった年齢や職業の方々と知り合い、一緒に笑ったり、悩んだり、成長を喜び合える仲間ができました。共通の「空を飛びたい」という思いがあるので、初対面でも自然と会話が弾みますし、一人では続けられなかったことも仲間がいるから頑張れています。

また、以前より空や風を見ることが増えました。「今日はどんな風が吹いているかな」「雲の動きはどうかな」と、何気ない景色にも目を向けるようになり、自然を身近に感じられるようになりました。

そして何より、自分自身の成長を実感できることです。最初は機体を持つことすら大変だったのに、少しずつできることが増えていく。その積み重ねが自信につながり、「次はもっと上手く飛びたい」というモチベーションになっています。

■ハンググライダーの一番の魅力は？

やっぱり、一番の魅力は空を飛べることです。

平日の仕事で溜まった疲れやストレスも、週末に空へ飛び立つだけで不思議と軽くなります。空を飛ぶ時間は日常から解放される特別な時間で、最高のリフレッシュになっています。


自然の中で過ごす時間そのものが、とても贅沢。

私はまだまだ技術不足で、ベテランのように自由自在に飛び回ることはできません。それでも、テイクオフして足が地面から離れる瞬間の高揚感は何度味わっても特別です。

頬をなでる風、眼下に広がる小さな家々や田んぼ、木々に映る機体の影。その景色を眺めながら、「本当に自分は空を飛んでいるんだ」と実感できる瞬間が何より幸せです。

それに、不思議とハンググライダーをしに来ると時間がゆっくり流れるような気がします。スマートフォンを見る時間も減って、目の前の風や自然だけに集中できる。悩みや心配事も一旦忘れて、自然の中で過ごす時間そのものが、とても贅沢だと感じています。

■これからの目標は？

まずは、もっと経験を積んで、安全に楽しく飛べるパイロットになることが目標です。風を読んで、自分の思い描いたラインを飛べるようになり、一つひとつ技術を身につけていきたいと思っています。

そして、いつかは先輩方のようにサーマルを使って長く飛んだり、景色を楽しみながら余裕を持ってフライトできるようになりたいです。

また、私自身がYouTubeで偶然見つけた一本の動画をきっかけに人生が少し変わったように、「空を飛んでみたい」という夢を持っている人に、ハンググライダーという世界があることを知ってもらえたら嬉しいです。少しでも興味を持った方には、ぜひ一度見学や体験に来てほしいと思います。実際に空を飛ぶ人を見るだけでも、「こんな世界があるんだ」ときっとワクワクするはずです。

■この記事はダイジェスト版です。全文はJHFウェブサイトでご覧ください。バックナンバーも掲載中です。

【JHFウェブサイト】
https://jhf.hangpara.or.jp/flyers_voice/flyers_voice35.html

第48回鳥人間コンテスト2026

大阪工業大学・東京理科大学鳥科チームに栄冠

報告：山本　貢

琵琶湖の夏の風物詩と言える鳥人間大会が、今年も７月25日と26日に開催されました。

本年の大会は天気には恵まれたものの、２日間とも午後から強風で競技が続けられなくなりました。そのため、人力プロペラ機部門は全機飛行、しかし、滑空機部門が７機フライトできずに終わってしまいました。

25-26日：人力プロペラ機部門

大会初日、早朝より人力プロペラ機部門から始まり、晴天弱風の好条件の中、順調に飛行が続きます。

名門、大阪府立大学堺・風車の会が5,065mというまずまずの記録。

この後、いつも片ペラ（プロペラが一枚だけ）にこだわり続けていた大阪工業大学チームが、折り返し地点を回って再び会場に姿を現し、24,671m飛行します。

これは同チームの最長記録！

東京科学大学meisterも折り返し地点を回り22,722mを飛行しますが、わずかに大阪工業大学の記録に届かず、この後は強風のため競技中止となりました。

翌日、まだ暗いうちに競技再開。昨年のディフェンディングチャンピオン大阪大学albatrossが15,637mと健闘しますが、大阪工業大学の記録には及ばず…。

全機飛行の結果、優勝は大阪工業大学に輝きました。

大阪工業大学は、今回が初優勝。こだわり続けてきた片ペラ方式は、理論上は最も効率が良いはずなのですが、いかんせんバランスの悪さで振動が出やすく、それが理由でかえって効率が落ちてしまうなど難しい問題がありました。

同大学では、長年あらゆるアイデアを試してその問題を克服し、徐々に現在の効率の良いプロペラになるよう取り組んできた歴史があります。

26日：滑空機部門

続いて滑空機部門が始まりました。この日も弱風の好条件に恵まれ、競技が進められます。



人力プロペラ機部門、みごと優勝した大阪工業大学。



滑空機部門優勝は東京理科大学鳥科チームが勝利。

最初に飛んだ東京理科大学鳥科チームがいきなり442mを記録！

その後も次々と飛行していくも、好条件なのに何故か記録が伸びません…。

結局、飛ん女の会が337m飛ぶも、この時点で強風となり競技中止。

滑空機部門の優勝は、最初に飛んだ東京理科大学鳥科チームに輝きました。

今年は海外からもお客様が…。インドからやって来たharsh（ハーシュ）です。彼は、今年の参加はかなわなかったものの、来年のエントリーを目指し、その情報収集のために来日しました。

私がサポートをして、ハンググライダーの構造の勉強をし、茨城のスクールでハンググライダーの練習も経験。そして、琵琶湖にて実際の鳥人間大会も見学しました。

非常に勉強熱心で、礼儀正しく、好青年。その好奇心と行動力に、いつも私は驚かされていました。Harshはきっと来年、素晴らしい機体を作って、再び日本にやってくることでしょう。



プラットホームに立つハーシュ（左）と筆者。

●鳥人間コンテスト●

読売テレビ放送が主催、JHFが協賛する鳥人間コンテストは、毎夏、滋賀県彦根市の琵琶湖で開催され、参加者たちが自作した飛行機を操縦して飛行距離等を競う。1977年開催の第１回にはハンググライダーパイロットが多数参加、岡芳樹（良樹）さんが優勝した。

JHF LIVE

ハング・パラの魅力を随時発信中

JHFの活動をいち早くお伝えするため、ハング・パラ振興委員会が中心となって立ち上げた『JHF LIVE』ですが、大会の様子やフライヤーへのインタビューなどを動画で随時発信しています。

皆さま、情報発信源となるXアカウントのフォローと拡散をお願いします。

Xをされていない方のためのポータルサイトも用意しました。右下のQRコードのサイトを「お気に入り」に保存していただけたら幸いです。メールアドレスを登録すると、新しい投稿のお知らせをメール通知で受け取れます。

【X】
https://x.com/JHF_LIVE

【ポータルサイト】
https://jhfhangpara.wixsite.com/jhf-live





第13回JHFハンググライダー・パラグライダーフォトコンテスト　最優秀賞　中島士爵「槍の先にある空」

写真で空の仲間を増やそう！
第13回JHFハンググライダー・パラグライダーフォトコンテスト　入賞作品発表

ハンググライダーやパラグライダーの写真を多くの人に見てもらうことによってこのスポーツの普及に繋げることを目的とするJHFフォトコンテスト。「ハンググライダー、パラグライダーが中心となって撮影された写真で一般の人の目を引きつける」「ハンググライディング、パラグライディングの楽しさ、素晴らしさ、そして身近なスポーツであることを伝える」という二つのテーマで作品を募集し、108作品の応募がありました。今回もフォトグラファーの嘉納愛夏さん、山本直洋さん、そして竹村治雄JHF会長が厳正な審査を行い、掲載の結果となりました。入賞の皆さま、おめでとうございます。

なお、入賞・入選作品ならびに応募作品の中の季節感のある優れた写真で2027年JHFカレンダーを作ります。詳細は16ページでご覧ください。

最優秀賞
中島士爵「槍の先にある空」
撮影地：北アルプス槍ヶ岳

●受賞者から●

この度は大変光栄な賞をいただき、誠にありがとうございます。

「槍の先にある空」というタイトルは、「槍ヶ岳の上空」を表しているのと同時に、「槍ヶ岳の向こう側にある空景色」も表現しています。

『――パラグライダーで槍ヶ岳を飛べる――』

パラグライダーでこんなこともできる、こんな景色も楽しめる、ということを知ってもらいたく、今回応募させていただきました。写真はアクションカメラを使用して自撮りしていますが、その中で最も絵になったのが槍ヶ岳とパラグライダーを一枚に閉じ込めた写真でした。

実際に槍ヶ岳の上空を飛んだ際には、これまで感じたことのない、言葉では言い表せないような興奮に包まれました。そして、上空から見た残雪期の槍ヶ岳は、本当に息をのむほどの美しさでした。

この日は槍ヶ岳の上空をフライトした後、双六岳を経由して裏銀座をさらに北上。五竜岳まで到達し、国内山岳フライト史における新たな一歩を刻むことができました。これからもまだ見ぬ景色を追い求め、安全にパラグライダーを楽しみたいと思います。

最優秀賞　中島士爵「槍の先にある空」



●嘉納評●

一般の人がこの角度の山肌を肉眼で見ることができるのは、飛行機に乗った時ぐらいだろう。JHF写真コンテストの１回目からモーターパラグライダー写真家の山本直洋さんと審査員を務めさせていただいている。その山本さんが「これはすごい」とこの写真を見るなり呟いた。十数年間で数度しか聞いたことがない一言だ。

私はフライヤーではないが、山肌が鮮明に近くに迫っていて、フライヤーである撮影者がそれ以上の高さで飛んでいることでそのすごさを理解できた。

グライダーが大きく写っているということも合わせてコンテストのテーマを必要十分に満たしているのは重要なポイントだ。

天候も申し分なく画角や配置も良いと思います。グライダーのデザインがシンプルなのも作品の質に貢献しています。実際の肌感覚には到底及ばないまでも、写真を見た人が上空の空気や高揚感を想像・追体験できるすばらしい作品です。飛んでみたい、と思わせてくれました。

●山本評●

この作品を見たときまず驚いたのは、エンジン付きではなく通常のパラグライダーでこの場所を飛んでいるということです。

ここまで到達するには、高度なパラグライダー技術はもちろん、天候などの条件も整っていなければなりません。そして、たとえ飛行できる条件が揃っていたとしても、相当な勇気がなければこの場所まで飛んでくることはできないでしょう。

そんな、飛ぶだけでもかなりの神経を使う場所で撮影されたにもかかわらず、写真としてのクオリティも高く、本当に素晴らしい作品だと思います。

360°カメラで撮影されたものだと思われるため、後から画角を選ぶことができるのだと思いますが、適当な位置から撮ってもこのような良いアングルにはならないでしょう。パラグライダーとパイロット、ハーネスの位置がバランスよく配置されており、その先に広がる北アルプスの雄大さもしっかりと伝わってきます。

飛行の技術的な難しさと、写真としての構図や完成度、その両方が高い作品です。まさに最優秀賞にふさわしい作品だと思います。

優秀賞
中村正哉「ミルフィーユ」
撮影地：山口県高照寺山エリア

●受賞者から●

この度は、私の写真を優秀賞に選出していただきありがとうございます。

あの日、標高650mのテイクオフ場からタンデム機が飛び立った瞬間、ファインダー越しに息をのむ光景が目に飛

び込んできました。目の前には高度ごとに表情を変える見事な「三層の雲」が広がっており、まるで不思議な世界へ飛び出したかのようでした。層積雲や入道雲、綿雲の合間にのぞく青空のグラデーションと、美しい機体のカーブ、光と雲が織りなす一期一会の美しさに夢中でシャッターを切りました。

私は地上からの撮影専門ですが、10年近く快く撮影をさせてくださっている山口県岩国市の高照寺山スカイセーリングのフライヤーの皆様に心より感謝申し上げます。今後も写真を通じてこの素晴らしい魅力を伝え、「私も飛んでみたい」と思ってもらえるお手伝いができれば幸いです。

●嘉納評●

一目見てコントラストが面白いと思った。雲のサンドイッチの具のようなグライダーとフライヤー。暗雲に映えるグライダー。そのグラデーションカラーの一部であるブルーが雲間に見える青空とリンクして調和と心地よさを生んでいます。

暗雲と青空と勢いのある白い雲、その下のさざれ石のような雲は「いい時もあれば悪い時も、きらりと光る瞬間もある」あらゆる人の一生のようで、ポエティックでもあります。また、ほぼ水平に配置された写真を構成する要素が潔さを感じさせます。広告としても使いやすい（真ん中に文字が入れられる…）一枚だと思います、というかもし私が広告のデザイナーだったら使いたい！と思いました。

●山本評●

選考の際、応募作品全体に目を通した中でまず目に留まった印象的な作品でした。写真作品としてのクオリティが高い作品です。

雲の濃淡、パラグライダーとパイロットの位置や大きさ、そして切り取る範囲など、撮影時点から考えて撮られていることが感じられます。

通常このような黒い雨雲の下を飛行するのは危険ですが、この写真はおそらく望遠で撮影されており、見た目の印象よりも雨雲は遠くにあるのではないかと思われます。グライダーにも光が当たっていることから、被写体が飛んでいる上空は晴れていたのでしょう。

さらに、雨雲の奥には白い雲と青空が見えており、光と影のコントラストによって写真に奥行きを感じさせています。

欲を言えば、奥の白い雲の下に見えている山が中途半端な位置で切れているところが少し残念です。山の裾まで入れるか、あるいは思い切って山を画面から外してしまったほうが、よりすっきりとした構図になったかもしれません。

いずれにしても、審査員一同、高く評価し、優秀賞に選ばせていただきました。

優秀賞　中村正哉「ミルフィーユ」



審査員総評

●嘉納愛夏



スカイスポーツなので当たり前といえば当たり前なのですが、今年はとくに青い写真が多いなという印象でした。次に秋の写真が多く、めずらしく春の花と一緒に撮ったものが少なかったです。そしてクリスマス時期のサンタクロースなどのコスプレは皆無、ぬい撮りも非常に少ない。規制が少ないゆるめの写真コンテストですが、応募作品が「真面目でまとも」になってきた（なってしまった?!）感じがしました（笑）。

水準の高い写真を複数送ってくれる方も何名かおられ、ありがたかったです。また、ハンググライダーの作品が増えたことも喜ばしい。

空をテーマにすると自由さ、雄大さを表現しやすいと思いますが、広いだけに画面が閑散としがちになるのもわかります。撮影者の方々にはいろんな作品を見て参考にしてほしいなと思います。

●山本直洋



今回、108点の応募作品の中から選考をさせていただきました。

JHFフォトコンテストが始まった最初の頃と比べると、全体的に作品のクオリティが大きく向上していると感じました。当初は「とりあえず撮ってみた」というような写真も多く見られましたが、最近では「写真作品としてどう見せるか」を意識して撮影された作品が増え、全体的に完成度の高い作品が多くなっています。360度カメラや小型アクションカムを上手に使いこなす方も増えてきました。

ただ記録として撮影するのではなく、構図や光、被写体の配置などを意識して撮ることで、写真としてのクオリティはさらに高くなります。すでに安定して作品を撮れるようになった方は、ぜひ次のステップとしてレンズやカメラを変えてみたり、スローシャッターやストロボを使った撮影に挑戦したりするなど、これまでとは違った撮り方にもチャレンジしてみてください。

そして、実は以前よくあった「とりあえず撮ってみた」という写真の中にも奇抜でおもしろいものもありました。

過去にフォトコンに応募してみたけど入賞できずやめてしまったという方も、来年はぜひまたとりあえず撮って応募してみてください！

●竹村治雄



このたびは、JHFフォトコンテストに多数のご応募をいただき、誠にありがとうございました。会員の皆様はもちろん、会員以外の方々にも広くご参加いただきましたことを、心より御礼申し上げます。

応募作品には、大空を舞う爽快感、仲間と過ごす喜び、そしてハンググライダー、パラグライダーを心から楽しむ姿が生き生きと写し出されていました。どの一枚にも撮影者ならではの感性と物語があり、甲乙つけがたく、審査は大変難しいものとなりました。

これからも、空を飛ぶ楽しさと素晴らしさを多くの方々に伝えていただき、本コンテストを共に盛り上げてくださることを願っております。私自身も、皆様の作品を通して空の魅力に心を動かされました。次回も素晴らしい一枚との出会いを楽しみにしています。

入選

岡田伸弘「Naoki!」
撮影地：静岡県西富士エリア



中村浩希「富士とパラと秋」
撮影地：静岡県朝霧エリア



Rick Neves「大地を駆ける二人／Racing the Ground Together」
撮影地：ニュージーランド Wanaka



山田晴之「月まで」
撮影地：静岡県朝霧高原とんぼエリア



2026パラグライディング日本選手権 in ニセコ

熾烈なレースを勝ち抜いたのは伊澤光・平木啓子

2026年9月19日-23日　北海道ニセコ町ニセコフライトエリア　報告：実行委員長　濱田 革

北海道では、ニセコで半世紀以上にわたって活動されてきた遠藤洋二氏が中心となり、過去に２回の日本選手権が開催されている。1988年にハンググライディング日本選手権、1993年にパラグライディング日本選手権だが、パラ日選は不成立となり、今回の日本選手権の成立はエリアとしての悲願であった。濱田がエリア運営を引き継ぎ、３回のJリーグ開催で実績を積み、遠藤氏は、毎朝早くからランディング場整備を進め、日本選手権開催を迎えた。

DAY1（9/19）

朝は小雨、午後からの回復に期待しタスクを設定するも回復は遅れ、昼過ぎにキャンセル。

DAY2（9/20）

朝から雲底は低く、小雨混じりの空模様。早々に競技キャンセル。午後には雲底が上がり数名がフリーフライト。

DAY3（9/21）／TASK1

減率は良好、積雲も発生し絶好のコンディション予報。山沿いを往復し、ニセコ町の有島記念館をゴールとする35kmのタスクを設定。

続々とテイクオフした選手は、約1,500mまで上昇。13時に一斉スタート。モイワSSを大集団でクリア。岩﨑、平木、伊澤、中村らが山回り。荒井、能祖ら少数精鋭が低い高度で直線コースを選択。次第に山沿いのコンディションが活発化、スピードがさらに上昇。

手練の上位グループは、リフトに入っても回さず、滑るように距離を伸ばす。岩﨑、平木、伊澤の３名は、ゴール到達高度マイナス300mでファイナルグライド。コンバージェンスラインを読み切り岩﨑が勝負を制す。上位３名は55分台、平均速度は約40km/hに達した。セカンドグループでは、長島（選手兼スタッフ）がコンペ機と互角の勝負を繰り広げ、スポーツクラスのトップゴール。コンディションは、その後さらに好転。約60名がゴール。

DAY4（9/22）

朝から北風が吹き荒れ、競技キャンセル。明日に望みをかける。

DAY5（9/23）／TASK2

中層に広がっていた雲が徐々に抜け、好転の予報。山沿い往復に沖出しを絡め、有島記念館ゴールの40kmのタスクを設定。

12時にスタート。山沿いの大集団がファーストパイロンへ向かうが、南風の影響で下がる。沖の伊澤、平木らは南風をかわしパイロンをパス。レースが進むにつれ、平地に海風が侵入。積雲も次第に勢いを失い、先行していた岩﨑、多賀、荒井は大きくタイムロス。

一方、伊澤、山下は、着実に高度を獲得しトップ争いをリード。平木が続く。沖のパイロンからの帰り、モイワを目指した伊澤がイワオヌプリを目指した山下を制し、一気にゴール到達高度に達し、渾身のファイナルグライド。伊澤トップでゴール！　山下２位、平木３位。長島がスポーツクラスのトップ。その後海風はギリギリのところで踏みとどまり、サーマルトップが上昇。約半数の選手がゴール。

成立した２本は、いずれもコンディションを読む力、判断力、スピードが求められるハイレベルなレースとなり、日本のトップを決めるにふさわしい競技となった。2026年日本選手権者は伊澤光。女子日本選手権者は平木啓子。北海道出身で遠藤氏の生徒であった平木が勝利したのはエリアの誇りである。

近年インバウンド客等の農地への立ち入りが問題になっている中、農地へのアウトランディングがなかったことは、エリアと大会存続に向け安堵したところ。

大会開催にご理解ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。

また、競技委員長村上氏、内地スタッフの浅野、内田、篠原、鈴木、冨田、中里、福田各氏、クラブ員スタッフの池野、上野夫婦、後山、木村、小林、松柳各氏、気象担当の内藤氏……皆さんの献身的な働きによって無事に日本選手権が成立しました。ありがとうございました。

［総合］

１位	伊澤	光	神奈川	1976
２位	平木	啓子	茨　城	1894
３位	山下	敦子	兵　庫	1888
４位	隈	秀敏	東　京	1768
５位	岩﨑	拓夫	京　都	1751
６位	中村	浩希	愛　知	1715

［総合女子］

１位	平木	啓子	茨　城	1894
２位	山下	敦子	兵　庫	1888
３位	吉川	智子	栃　木	1614

［スポーツクラス］

１位	長島	信一	石　川	1624
２位	松本	健吾	千　葉	1553
３位	中川	喜昭	茨　城	1479
４位	梅枝	直裕	愛　知	1454
５位	小林	敦之	東　京	1448
６位	氏田	敏彦	鹿児島	1435

日本選手権者から

伊澤 光

今回、日本選手権者という身に余る栄冠を得ることができ、とても嬉しいです。羊蹄山を横目に、雄大な北海道の大地を感じて飛ぶニセコの空は、普段飛んでいる場所とはまた違った魅力があり、昨年初めて飛んで以来、再訪を願っていた場所でした。

タスク１で２位につけて迎えた最終日のタスク２は、40km超でややテクニカルな設定。スタート前に自分だけ低くなり、手が届く範囲に見えていた栄冠も幻かと思いかけました。しかし、前夜の13kmジョグ＆断酒の効果か、スタート５分前に良いサーマルにあたり、なんとかレースに加わることができました。その後はグライダー、ハーネスともに最高のギアに助けられ、スタックすることなく進めました。

前方に誰も見えない中でゴールした瞬間は、無事にゴールできた安堵感とともに、長く続けてきた競技生活が頭をよぎり、改めて嬉しさが込み上げました。

パラグライダーを始めた初日に左足腓骨を骨折しましたが、その後は大きな怪我もなく37年、1990年代から競技にも参加してきました。長く続けてこられたのも、仲間や大会関係者、応援・サポートしてくださる皆様のおかげです。主催者、スタッフの皆様にも心より感謝いたします。これからも安全第一に、競技を楽しみながら飛び続けていきたいと思います。



堂々たるフライトで日本選手権タイトルを手にした伊澤選手、TASK1のゴール。

平木 啓子

ニセコは私の出身エリアです。在籍当時はコンペ機に乗るほどの腕前はなく、そう広い範囲を飛べていたわけではありませんでしたが、山の名前や地形は良く知っています。

また、今回セーフティコミッティに選ばれ、飛びをイメージしながらタスクを組めたことも良い飛びに繋がりました。

レースでは、今までになく思い切りよく飛ぶことができました。時には策に溺れて遅れてしまう場面もありましたが、ほぼ自分のラインを貫いて飛びました。こんなに気持ちよく飛べる大会はそう多くありません。自分の持てる力を出し切れたと感じています。

結果は総合２位・女子優勝という、出来すぎなくらいの好成績を収めることができました。自分の原点であるエリアで勝つことができ本当に嬉しいです。

久しぶりにニセコの広大な景色を眺め、師匠やエリアの皆に会い、改めて「私はなんて良いエリアに育ててもらったのだろう」と思いを馳せました。



総合入賞者



総合女子入賞者



スポーツクラス入賞者（左は竹村会長）

第２回FAIジュニアパラグライディング世界選手権

世界の空で成功も失敗も経験して

2026年8月22日-30日　北マケドニア Krushevo　報告：チームリーダー　佐藤 友紀

８月22日から９日間、北マケドニアのクルシェボで第２回ジュニアパラグライディング世界選手権が開催された。日本代表として出場したのは、下野悠敬、能祖雄大、花田瞬の３選手。私はチームリーダーとして帯同し、若い選手たちとともに世界の舞台へ挑んだ。

クルシェボはヨーロッパ有数のXCエリアとして知られるが、今大会は決して「飛びやすい」ものではなかった。強烈なサーマルと安定したフラットが混在し、逆転層や強風、積乱雲によるタスクストップなど、毎日のように異なる表情を見せる難しいコンディション。その中で選手たちは失敗と成功を繰り返しながら、確実に世界との距離を縮めていった。



日本チーム全員ゴールのタスク２。トップガーグルがゴールしてきた。中央が花田選手、タスク６位。



タスク２。ゴールした能祖選手（左）と花田選手（中）。



タスク２。下野選手（右）もしっかりゴールした。

公式練習で得た世界基準

現地入りした選手たちは、到着翌日から休む間もなく練習フライトへ。公式練習日の約56kmタスクでは、場所によって+８m/s近いサーマルがある一方、フラットではほとんど上がらないという極めてトリッキーな条件だった。

花田選手は1000点を狙う積極的ラインを選び、能祖選手は山からフラットへの独自ルートに挑戦。下野選手は焦らず高度を回復してから追い上げる作戦を採った。それぞれ結果はボムアウトに終わったものの、「なぜ降りたのか」が明確だったことは大きな収穫だった。海外エリア特有のフラット攻略や巨大ガーグルでの位置取りなど、日本では経験できない要素を短時間で吸収できた１日だった。

タスク１：サバイバルレース

最初の公式タスクは71km。スタート前から逆転層が強く、十分な高度を得られないままレースが始まった。さらに強い南風が加わり、15km地点では出場選手の半数以上がランディングするサバイバルレースとなる。



日本チーム。前列左から佐藤、下野、花田、後列に能祖。

この日、日本チームでもっとも印象的だったのは下野選手だった。前日から食あたりによる発熱と腹痛を抱えながらも、日本勢最長となる28kmまで粘り抜いた。花田選手も17km地点まで健闘したが、ゴール北側に積乱雲が急発達したためタスクはストップ。厳しい幕開けではあったが、世界大会特有の判断力が問われるタスクとなった。

タスク２：全員ゴールの自信

日本チームにとって転機となったのが60.6kmのタスク２だった。

西風予報により全員がテイクオフできるかどうかも懸念されたが、予想より早く逆転層が崩れ、良好なスタート条件が整った。花田選手はリードガーグルの中で冷静なレース運びを見せ、一時は単独で先行しそうになる場面でも無線の指示を受けてグループフライトへ切り替えた。その判断が功を奏し、５番手でゴール。タスク６位となる955.8点を獲得した。

下野選手は途中のサーマル選択でトップ集団から離れ28位、能祖選手はスタート直後のハーネストラブルで出遅れながらも26位まで追い上げた。そして何より、日本チーム３人全員がゴールできたことが大きな自信となった。

タスク３：スピードレースへの適応

56.7kmのタスク３は、ギリシャ国境手前のゴールを目指すスピードレース。3000mまで一気に上がるコンディションの中、巨大ガーグルはほとんど崩れずノンストップで進んでいく。

花田、能祖、下野の３選手とも最後まで集団に食らいついたが、サーマリングの精度やグライド性能のわずかな差によって徐々に後方へ下がっていった。それでも花田29位、能祖30位、下野31位で全員が890点台を獲得。世界のトップとの差は、大きなミスではなく、「数秒・数メートル」の積み重ねであることを実感したタスクだった。

タスク４：100kmで見えた可能性

ようやくクルシェボらしいクラシックコンディションが訪れ、待望の

100kmタスクが発表された。日本チームも理想的な位置からスタート。しかし、フラット側の逆転層はまだ崩れておらず、第２ターンポイント付近ではリードガーグルが一気に崩壊。多くの有力選手が着陸する過酷な展開となる。

この日、能祖選手は独自の判断で少人数グループを選択し、道路沿いの町で力強いサーマルをつかむと、一気に高高度へ復活。第２ターンポイントを通過した時点ではトップガーグルを追い抜き、単独首位に躍り出た。５km以上後続を引き離したフライトは、チームメンバーのみならず日本からライブトラックで観戦していたサポーターももっとも興奮した瞬間だった。

しかし、再びフラットへ入った場面で単独先行を続けた結果、リカバリーすべきタイミングを逃しランディング。あと１つ判断を変えていれば1000点も十分狙えた内容だけに、本人にとっても忘れられない悔しさとなっただろう。

タスク５：能祖選手、２位の快挙

翌日は強風予報のため50kmのショートタスク。ほとんどの選手が安全な山ルートを選ぶ中、能祖選手はオーストリアのモリッツ選手とともにフラットの最短ルートへ飛び出した。

町ごとの弱いサーマルを正確につなぎ、２人はメインガーグルを10km近く引き離す独走態勢。花田選手と下野選手も途中からフラットへ切り替えて追い上げたが、逆転層と強風に苦しみランディング。

能祖選手は最後まで先頭争いを演じ、惜しくもトップは逃したものの堂々の２位ゴール。日本チームにとって今大会最高の成果となった。

夜のパイロットディナー、続いて開かれたパーティでは、世界各国のジュニア選手たちが国境を越えて交流。同年代の仲間とのつながりという大きな財産も得ることができた。

最終２タスクとコンプレイン

ここまで全日フライトはできてきたが、クルシェボらしい山もフラットも縦横無尽に飛び回れるというようなコンディションにはなかなか恵まれていない。そしてここにきて、さらに尻すぼみに渋くなっていった。

タスク６は57kmだったが、強い逆転層によりテイクオフレベルから＋100mがせいぜいの渋いコンディション。プラス１以下の弱いサーマルに、斜面ギリギリで大人数がしがみつき駒を進めるが、日本の３選手とも道半ばでランディング。まもなく雨がぱらつき始め、タスクストップに。

最終のタスク７は76.89kmが発表されたものの、予報に反してまたもや強い逆転層、さらに上空の強風で厳しいコンディション。結局この日もタスクストップとなったのだが、「レベルコール」を巡り各国チームからコンプレインが提出される事態となった。

日本チームも能祖選手からの正確な状況報告をもとにレベル２を申告。主催者によるGPSログと関係選手への聞き取りの結果、実際に強い乱気流やグライダーの潰れなどが確認され、抗議は棄却された。

安全と競技の両立、そこに各国チームの思惑が絡むという、カテゴリー１大会ならではの難しさを象徴する出来事だった。

大会を終えて

最終成績は、能祖選手15位、下野選手32位、花田選手33位。国別では日本は８位という結果だった。

表彰台には届かなかった。しかし、この数字だけでは語れない価値がある。100kmタスクで首位を走った能祖選手、世界トップ集団の中で５番手ゴールを果たした花田選手、高くしっかり上げて自分のフライトを貫き戦い抜いた下野選手。それぞれが世界で十分に戦える力を示してくれた。

今大会では、チームポイントを優先する戦術はあえて採らなかった。海外経験の少ない彼らにとっては、チームとしての結果よりも、各自が自ら考え、判断し、世界の空で成功も失敗も経験することが大切だと考えたからである。下野、能祖、花田各選手は、今大会から得たものを今後それぞれの場所で活かしていくことで、日本のパイロットのレベル引き上げの一翼を担ってくれると信じている。

最後に、大会期間中、日本から温かい声援を送り続けてくださった皆様、そして選手たちを支えてくださったすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

［総合］

１位	Alvaro Romero Camacho	スペイン	3659.7
２位	Noe Court	スイス	3648.8
３位	Matthis Nedele	ドイツ	3516.3
15位	能祖　雄大	日本	3131.8
32位	下野　悠敬	日本	2530.6
33位	花田　　瞬	日本	2527.0

［女子］

１位	Ivone Silva	ポルトガル	2778.9
２位	Kanan Thakur	イギリス	2643.1
３位	Zoe Vanhersecke	イギリス	2087.3

［国別］

１位　スイス
２位　イギリス
３位　ドイツ
８位　日本

●レベルコール●

安全管理のため、フライト中の選手たちが現在の空域の危険度や気象コンディションを報告する。レベル１：問題なし（良好または許容範囲内）で競技続行可能。レベル２：局地的に風が強い／荒れているが競技中止の必要なし。レベル３：非常に危険、競技続行不可。



総合トップ10表彰



女子トップ７表彰



国別トップ３表彰

JHFからのお知らせ／お願い

■2027年JHFカレンダーを頒布します

第13回フォトコンテストの入選作品と応募作品から選んだ季節感のある写真で、2027年のJHFカレンダーを作り頒布します。A4サイズを上下に開いて各月A3サイズ縦型の吊り下げタイプ。ご希望の方はJHF登録スクールでご購入またはJHF事務局にお申し込みを。

頒布価格は１冊1,000円（送料を含む）。頒布の準備ができ次第、詳細をJHFウェブサイトでお知らせします。



■お名前・ご住所が変わったら早めにお知らせください

宛先不明で戻ってくるJHFレポートが少なくありません。JHFレポートにはフライヤー会員の皆さまにぜひ読んでいただきたい情報を掲載しています。氏名や住所に変更があったら、お手数ですが早めにメールかFAXで下記を事務局にお知らせください。

□フライヤー会員番号　□お名前（氏名変更の場合は新旧名）　□新住所
□連絡先電話番号　□メールアドレス

各種申し込み／お知らせ／お問い合わせはJHF事務局へ

公益社団法人
日本ハング・パラグライディング連盟
〒114-0015 東京都北区中里1-1-1-301
TEL.03-5834-2889 FAX.03-5834-2089
E-mail:info@jhf.hangpara.or.jp
https://jhf.hangpara.or.jp

事務局業務効率化のためできるだけメールでのご連絡をお願いします。

JHFフライヤー会員マイページ メールアドレス登録のお願い

JHFでは会員管理システム等の改修を準備中です。郵便料金値上げへの対応、事務効率化のため、システム改修後は更新通知や会員証等の発行・発送等について、メールを利用してご案内していく予定。もうすぐマイページで会員証、技能証、登録情報を確認できます。まだメールアドレスご登録のない方はこちらからご登録ください。

【メールアドレス登録】
https://jhf-member.hangpara.or.jp/email-registration

JHFレポート255号
発行日：2026年（令和8年）10月30日
発　行：公益社団法人　日本ハング・パラグライディング連盟（JHF）
編　集：JHF事務局
印　刷：株式会社アイセレクト

本レポートの一部あるいは全部を無断で複写複製することはご遠慮ください。

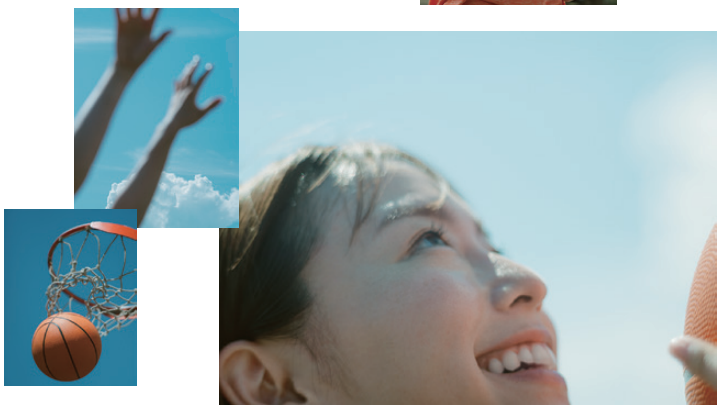
これからももっと、
私はスポーツを楽しむんだ。



卓球歴24年。バスケ歴1日。
卓球の200倍もの重さがあるボールは、
なかなか言うことを聞いてくれない。



それでも、体を動かすだけで気持ちがいい。
初対面でもあっという間に仲間になれる。
競技人生での楽しさとは違う、
スポーツの楽しさに出会えた。





スポーツを極める人も、楽しむ人も、
すべての人のために、
スポーツくじの収益は使われています。

スポーツくじ BIG toto WINNER DUNK

スポーツくじは、スポーツと人を育てる仕組み。

⑱19歳未満の方の購入又は譲り受けは法律で禁じられています。払戻金も受け取れません。運営・販売：独立行政法人日本スポーツ振興センター

上空利用可能 デジタル無線機 使用のお薦め

JHFではハンググライダーやパラグライダーのフライト中に使用する無線機として「簡易無線登録局」対応のデジタル無線機の使用を推奨しています。

デジタル方式なので混信が少なく、クリヤーで聞き取りやすくなっています。

上空利用 15チャンネルを搭載し現在販売されている機種は下記のとおりです。STANDARD製のVXD1S、ICOM製のIC-DPR4 PLUSシリーズ、八重洲無線のSRD580・SRD585シリーズ。

なお、JHFではSTANDARD製デジタル無線機を11台保有し、フライヤー会員に貸し出ししています。ご希望の方はJHFウェブサイトの「JHFのご案内」をご覧のうえお申し込みください。

すでにデジタル無線機をお持ちの方は、無線機の登録手続きを済ませ利用料を納めているかご確認ください。

登録をしないまま無線機を使用しますと、不法無線局として処罰の対象になります（１年以下の懲役または100万円以下の罰金）。

お忘れのないようお願いします。